第四巻　十一月號

婦人運動



職業婦人社發行


松屋の信條
弊店は常に良品本位に、流行の源泉たるを期し、品質柄合を吟味に吟味致し、御満足を願へる優秀品を差上げる事に、努めて居ります
松屋呉服店
東京銀座

第四巻 第十號

婦人運動

目次

編輯室より

今月は大體に於て消費組合運動に關するものを中心にして編輯をしました。私が中野に移り住むことになつて消費組合西郊共働社の一員として、この運動の實際にもふれてみる事にした記念にもしたいと思つて。それに丁度今月七日には、東京協調會館で第五回目の消費組合聯盟大會が開催される事になつてゐます。

◆

東京共働社の主婦の會の招待狀といふのに、次のやうに書いてあります。（前略）皆樣方の御主人が常に御來店下されて萬事御指導の宜しきを得た賜ものと感謝してゐる次第ですが、當組合の事業はとりも直さず組合員の家庭經濟の延長であり、又組合員相互の店であります。從つてこの家庭經濟には一家の主婦の方々が重大な任務をもつてゐられるのでありますから、今回主婦の會を催し主婦の方々に御來店を願ひまして、よりよく組合を理解して頂きより多く組合の發展と同時に、生活の安定をはかりたいと思ひます。云々

◆

わが消費組合運動の現狀は、なほかういふ招待狀を出して主婦を呼び出さねばならぬ程、理解ある主人の方が力瘤を入れてゐて主婦は主人の命に依つて組合のものを買つてゐるにすぎないやうな關係にあります。

然し、元來消費組合といふのはわれ〳〵の家庭經濟の延長に在るもので、主婦の自覺を待つて初めてその存在の意義を完うする事の出來る性質のものであります、私たちは特にかういふ婦人の日常生活に觸れた仕事の上から、婦人共同の立場を知り合つて一緒に働いてゆきたいものだと痛切に思ふのであります。

事務所 奥の自宅 ◎移◎轉

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部 貳拾五錢（郵税五厘）
半年分 壹圓四拾錢
壹年分 貳圓八拾錢

送金法

送金は振替が一番便利です
誌代の受取證は別に出しません
雜誌發送を以てこれに代へます

大正十五年十月廿八日納本
大正十五年十一月一日發行
東京市外中野町關三二四四
發行編輯兼印刷者 奥むめお
東京市芝區今入町拾番地
印刷所 研文社印刷所
東京市芝區明舟町一番地
發行所 職業婦人社
振替東京六四一六〇番



卷頭言

消費組合の理想

消費組合は直接に消費のために事業を經營する。それは資本主義が利潤のために經營するのに相應してゐる。利潤の劍は兩刃である。一方に傭はれ人から掠奪し、他方に消費者から掠奪する。この掠奪があるために貧富のへだゝりは甚だしく、無產階級はたえず生活の不安におそはれてゐる。それは實に今日のすべての社會的不正の根幹である。

消費組合はこの社會の本質と原理に突貫する。それがいかに小さな組合であらうと、その小社會はみづからの消費のために事業を經營する。その限りにおいてはその小社會の內部には、お互ひの掠奪なく、分配の不均等もない。互ひに奉仕するだけである。この社會が擴大して組合員が增し、事業が擴張すればするだけ、新しい原理の上に立つ社會は資本主義社會を蠶食する。その發展の頂上に於ては、つひに資本主義の社會にかはる消費のための社會を確立する。

消費組合は相互扶助の社會を確立する。それは資本主義が相互鬪爭の社會である事に應對する。現代の資本家はお互ひに相食んでゐるのみならず、無產階級を踏臺にしてそれをのり越えて金を儲けやうとしてゐる。從つて社會にかもし出される物はお互ひの憎惡と不信と猜疑である。このために社會の全ての人々は尊ときいのちを切りきざんでゐる。これ以上人類の墮落したことはなかつた。

この鬪爭の渦中に於て、たとえそれが如何に小さくとも、消費組合の內部では人々は協同してゐる。(本位田祥男)——「解放」消費組合號より——

婦人に必要な法律智識の研究を提唱す

布施辰治

一

他人をオトシアナに落ち込ませようとして陥穽を作つたものは、特に自ら其の陥穽に落ち込まないように注意して研究しなくとも、滅多に其の陥穽に落ち込むような事はありませんが、自分をオトシアナに落ち込ませようとして陥穽を作つて居る他人があると云ふ事を聞いたら、どうせ其の陥穽は一寸表面を見た丈けでは、容易に判からないように出來て居るに違ひがありませんから、種々注意深く氣を付けて、其の陥穽の所在や作り方やを研究調査して、萬一にも、其の陥穽に落ち込まないようにしなければ爲らないでせう。

　今日の婦人の法律智識に關する研究の必要な事は、全く斯ふした比喩通りの實狀にあると考へます。

二

　此の頃は、婦人參政權と云ふ問題が大變に八ケ間敷爲つて來て居りますから、自然法律問題に關する婦人の研究熱も高まつて來ることだろうと思ひますが、今迄の婦人は、あまりに法律問題に關する研究に無関心過ぎたので、一寸民法の結婚に關する一ケ條の法律智識を有つて居て呉れさへしたら、殆んど一生を棒に振るような結婚悲劇を見ずに濟んだらうと考へられるような事件が澤山あるのは、私の日常相談に來られる婦人事件でありますが、と云ふのも、平常必要な法律を研究調査して置かねば爲らない筈の法律智識をもつて居らない婦人の一大不幸です。

三

　婦人參政權と云ふ問題を、法律的に觀察致しますと、私共、一般國民の實際生活を支配する國家の法律は、男子ばかりの手に依りて作らるべき譯のものでは無いから、婦人にも左樣した法律の作り方に就いて、其の注意を聞いて貰はなければ爲らないのは勿論、婦人と男子とが、其の一半を持ち寄つて生活する人間社會の規律統制を使命とする法律は、矢張り婦人と男子とが其の一半づゝの力を持ち寄つて制定せらるべきものだと云ふ主張に爲るのであります。

　之れは、如何にも尤もな主張であつて、近き將來に其の實現を見るであろう事は、私の疑はない所であります。夫れに付けても、私共、一般國民の實際生活を支配する所の法律を、婦人の立場から觀て、どう作れば良いかと云ふ注文を出す爲には、男子ばかりの手に依つて作つた現行の法律が、どんな

に婦人に對して横暴なものかと云ふ現在の法律智識を充分に研究して置く必要があると思ひます。

四

其處で、私は、婦人に必要な法律智識として、男子ばかりの手に作られた現行法律が、如何に婦人に對して横暴なものかと云ふ現代法律の種明かし的解説を時々の機會に試みて居るのでありますが、夫れは、私が男子の立場を裏切つて婦人に内應すると云ふ譯のものでは無くて、人間としての男子と、婦人も、共に同等同權で無ければ爲らないと云ふ主張と、左樣した同じ人間の中でも、ヨリ不幸な立場に虐げられて居るもの丶爲に起つて、之を虐げる横暴者に反抗する同人類愛の熱意に燃ゆる、無產階級解放運動の精神に基いて居るのであります。

現代の法律は、勿論、日本國家の法律として日本國民全體の實際生活を支配するところの法律であつて、日本國民の一半たる男子が、他の日本國民の一半たる婦人を支配する爲めに出來て居る。日本國民一部分たる男子の法律ではありません。ですから、ほんとうに日本國民全體の爲に作られた——日本國家の法律は、日本國民たる男子の爲めにもなれば、婦人の爲めにも爲るように、同權同等のもので無ければ爲らない筈であります。けれども、現代の法律は、表面の看板こそ日本國家の法律として、日本國民の全部である男子の爲にも婦人の爲めにも、公平に作られて居る事には爲つて居りますが、男子ばかりの手に依つて作られた法律な爲めに、どうしても男子には偏頗な我儘が出來て、婦人には謂はれの無い虐げを壓制するように爲つて居る事を免かれません。

其處が、私の冒頭に書いたオトシアナの例であります。表面は、男子にも婦人にも公平な法律だから、婦人が惡ければ男子が法律に依つて婦人を裁判する事が出來るように、男子が惡るい時には婦人も亦、法律に依りて男子に制裁を加ふる事が出來ると云ふ事にして居りますが、實際は、婦人が少しも惡るくない時でも、男子が法律に依りて婦人に制裁を加ふる事の出來る陷穽を拵へて置くのだから、私は、今こ丶で、左樣した現代法律のどれがどの如ふに、婦人のオトシアナとして堀られて居るかといふ具體的解説を試みる暇がないのですが、かういふ抽象論で筆を擱くのは甚だ遺憾ですが、夫れでも、婦人に現代法律研究の必要な事と、婦人運動が、先づ婦人運動其のものを、經濟的にも、精神的にも、行動的にも、壓迫して居る法律の鐵鎖を、斷ち切る研究がまづ第一に必要であることを考へ付いて貰へば、甚だ結構なのであります。

家庭争議の流行

奥むめお

勞働争議とか、小作争議などと云ふ言葉は、一種の流行語にさへなつてゐるが、それにもぢつた家庭争議と云ふ言葉が、最近新しい流行語として、よく用ひられるやうになつた。

婦人公論、其他二三の婦人雜誌も先月であつたか、さうした題目を云ひ合はせたやうに、讀物として取扱つてゐたやうであるが、勞働争議、小作争議が現在の様な社會狀態の許に於ては、益々頻出する事は當然の事であるが、家庭争議の増加も、又當然避け難い一現象であると云はなければならない。

總括的に見て、家庭争議の原因が、多く生活難、三角關係、嫁舅の争等に起因してゐる事は、今も昔も同じ事て現在に於てはそれ等の原因を構成する諸要素が必然的に益々増加した事が所謂家庭争議流行の原因である事は云ふまでもないが、私が、今こゝに云うとするのは、現在に於ける特種的な社會的現象として現はれた、その社會的原因の一に就いてである。家庭と云ふものは由來極めて神聖な生活機關として永い傳統の許に支持され來たものであるが少しく眼を轉じて、是を社會的環境と比較して見るならば、我々は現在の大多數の家庭の內容が、如何に現代ばなれのしたものであると云ふ事に驚かされる。

現在の家庭は、その最初の出發點である結婚様式に於ても、その內容を成す日常生活の諸様式に於も、殆んど封建時代そのまゝの形態である。例へばその重要な機關の一つである臺所を見ても、近代文明のいろ〳〵の恩愛に浴してゐるのは、小數のブルジョア階級と都市居住者に限れてゐて、大多數の無產階級は百年一日の如く、チョンマゲ時代そのまゝの様式の許に置かれてゐる。其他、育兒、裁縫、洗濯、掃除等の諸様式に於ても全く同じである。さうした意味で、現在の多くの家庭の設備は、近代文明の產物である諸種の文化機關にも、社會環境の急激な變化にも、社會協同の精神にも殆んど絶緣體の狀態にあると云はなければならない。

それにも拘らず、一般家庭生活の重要な分擔者と、云ふよりも、事實上の主宰者である婦人の生活はどうか。封建時代には殆んど、目に一丁目をも見る事を許されなかつた大多數の婦人がブルチョアデモクラシが齎らした、恩愛として、兎に角自由に新聞雜誌を見得る程度に達してゐるし、又諸種の職

業機關が彼女達に解放されて、曲りなりにも人間意識、社會的知識を持つに至つてゐる。

彼女達が時代の當然の歸納としての自覺を、意識的に或は無意識的の中に持つやうになつた以上、その家庭にある、非文明的な不便な機關にその精魂を磨滅してまう事を厭ふのは、當然の事である。又如何に智識的な新思想の持主である處の彼女達の夫と雖も、永い傳統に養はれた婦人さへ厭ふ處の家庭勞働を生存競爭のはげしい勤勞生活につかれた身を持つて、手傳つて行くと云ふ事は當低不能な事ある事は云ふまでもない。然し現在のやうな家庭が存在してゐる限り、この非文明的、非文化的雜用は欠く事の出來ない必然的存在である。云ひ換へるならば現在の大多數の家庭では、いやが、應でもその組織そのものが、夫は主人として外に働き、妻は奴隷として內に働く事を欠く事の出來ない、必須條件として强要してゐるのである。然もこの宿命的條件を、刻々に熾烈の度を加へつゝある生活難が擾亂しつゝあるのである。

こう考へて來ると、さうした意味が生む、家庭爭議は現在のやうな社會狀態が續く限り、當低避ける事の出來ない必然的在存であると云はなければならない。と云つて、私は或批評家達が非難するやうにさうした婦人の家庭勤勞を、細心な心づかいを、輕蔑するものではない。否、寧ろ尊重するが爲めに、あらゆる社會進化に家庭組織を、その設備を順應させたいと思ふのである。

こうした意味での家庭組織の改革はさうした社會事實などには、全く無關心な爲政者の形式的訓令などは、何の効果もない事は云ふまでもないが、如何に個々の當事者達が努力し、道德的に反省するとしても、それだけでは、どうする事も出來ない事であつて、それ等のものが結びついた、當今の歸納としての社會組織の改革に待たなければならない事は云ふまでもない。

かくしてこそ、始めて、家庭爭議の其他の重大な原因である、生活難、結婚方法等より生ずる諸種の破綻に對しても、始めて光明を齎し得る事が出來るのである。

お詫び!

今月もまた發行がおくれてしまつた。例に依つて忙しい上に、引越しのごた〱と、印刷やの引越しとで重ね〱混雜して一層おくれて申しわけがない。この印刷が出來上らうとするとき急に、芝區明舟町へ事務所をもつことに決つた。何れ來月號に悉しい事情を書きます。



消費組合の準備

岡田超智

小さい家を建てるにも、圖面を引いて、材料を買集め、地均しをして、土臺石を堀込み、いろ〳〵準備をしなければなりません。又其前に、必要な資金も準備しなければなりません。消費組合といふ大きな事業に着手しますにも、中々準備がいるのは、當前でありませんか。だのに、世間では何の準備もせずに、消費組合を作りたがります。

こう申しては悪いが、どうも我々日本人は目前のことばかり見て、遠大のことが解りません。理想を持たずに骨折仕事をして苦しんだり、目的を知らずに駈け出したり、かなり無自覺に外國人の眞似をします。眞似をする場合に限つて、理想や目的や精神は了解されてゐません。只だ形ばかり見て、物眞似をします。世間では消費組合を作らうといふ人も、こう申しては失禮ですが、大抵はそうした部類の方が多い。ですから我國では、明治三十三年から、産業組合法を設けて、政府の役人方が非常に奬勵して居られるが、出來たものは不具の組合ばかりで、農村や都會を實地に歩いて見ますと、どうにか組合らしいのは一府縣に二箇所か三個所しかありません。百分比例にしますと九十九パーセントは出來損の不具組合であります。

人間一疋、女でも男でも、骨折つて社會の爲に盡すからは骨折甲斐がなければなりません。出來損ふて組合員に迷惑をかけたり、失敗した悪い風評を語草に殘し、却つて將來眞の組合が設けられる妨害をしたりするようでは、單に骨折損の草臥儲ばかりでなく、社會に對し申譯ないではありませんか。

消費組合——産業組合を設ける人々が九十九パーセント

迄出來損ふて不具になるのは準備なしで初めるからであります。理想と目的と精神を調べずに、自分一個の早呑込で獨よがりで、形ばかり外國の眞似をしようとするからであります。私は消費組合を作らうと相談を持つて來られる方へは何時でも口の乾く程、消費組合の理想や目的や精神やそうして實際に必要な色々の準備を說明して上げますが、私の忠言を呑込んで下された方は、未だ一人もないと云ふてゐゝ位です。私は思ふてゐます。そうした方が百人中の一人となるは僥倖で、百人中の九十九人となつて、失敗されるのは當然である。失敗される方の損失は氣毒と申上げて濟むが、濟まぬは社會に對する影響であります。消費組合を研究し、之を作り、又は既設の消費組合に入つてゐられる姉妹方よ。どうぞ消費組合の使命—理想と目的と精神—を了解して下さい。そして、どんな物質的準備がゐるかを悟つて下さい。

古い話を申し上げるようですが、消費組合運動の活きた第一頁を開いた人は、學者でもなければ、役人でもなければ、英雄でも豪傑でも、金持でも、思想家でもなかつたのであります。世界文明史を變化せしめた近世の大運動である消費組合は、實に貧乏な敎育のない勞働者によつて創められたのであります。

我國では英雄—豪傑、女傑、貞女、烈婦—などいふ、えらい人を崇拜し、その癖自分は平凡な人間であると謙遜して、其日のパンの事や、自分の懷へ一錢でも金を取込むことを心配してゐる癖に、學校から、或は社會から講談や薩摩琵琶や浪花節や新聞や雜誌や小說で敎へられることは、迚もえらい女傑貞女烈婦英雄豪傑成金志士貴族紳士豪商であります。が、外國では、少なくも近世の文明史を實地に編み出した人物は、勞働者百姓小學敎員といふた程度の平凡な人間であります。此事は皆さんが善く頭へ飲み込んでお子供を敎育する時に、注意しなければなりません。

東洋では豪傑を崇ぶが、西洋では模範人間を尙びます。そうして文明の大事業は、模範の平凡人によつて開拓されました。消費組合運動を實現して、世界文明史上に最大の頁を開いた勞働者は、二十八名の職工でありまして、英國ランカシヤ州ロチデール町のフランネル工場に通ふ人々でありました。

東洋流の英雄豪傑は、人と決して一所に事をやりません。

梶原源太が先陣をしかけると、佐々木四郎は後から聲をかけて噓を云ふ、さてはと源太景季が躊躇する瞬間に、四郎高綱は先頭へ駈け拔けて、天晴英雄豪傑となつて、日本外史に雷名を轟かす。さても賴山陽先生は、飛んだ歷史を書いて下されたものです。ですから薩摩琵琶でも、浪花節でも英雄豪傑の我利我利ばかりを鼓吹して、人間味のある模範人を町人百姓扱にします。最近英國から返へつた學生の話に、英國の公立學校では、體育にさへ個人的の競技は一切やらさない。テニスでさへ學校では禁止してゐて學校で公然やらす競技は、フツトボールとかボートレースとかいふチームウオークばかりだそうであります。英國ではそんなに迄して、共同一致の精神を養ひ拔け驅の功名爭や、ひとりよがりの我利我利盲者など、社會的に爪彈にされる空氣になつてゐます。この空氣から生れたものが勞働組合、勞働保險、無産政黨等々であります。消費組合も實に斯した空氣の中に育つた秋の菌であります。

秋を過ぎて寒い十二月二十一日、年は西暦千八百四十四年でありました。ロチデール町に平等開拓者組合といふ小さな看板が出されました。平等開拓者！　名前は素晴らしく大きいが、看板は小さかつた。看板の掲げられた所は借家でなく、貧乏な勞働者の長屋に無賃の居候をしたのであります。そんなに貧弱な平凡な處から、世界文化史の光が放たれました。

貧弱は無賃の居候だけではありません。彼等は消費組合を作るには、出資金を持寄らねばならぬことを了解し、一年數ケ月に亙つて其準備をしました。我國では、消費組合を作るに出資金の入る當然すぎる程當然であることさへも了解出來ない人が多いのですが、平等開拓者の二十八名は、善く之を了解し、一年數ケ月かかつて其準備をしたのであります。では澤山の金を持寄つたのでせうか。いゝえ彼等が持ち寄つたのは、たつた十圓づゝであります。

十圓宛持寄るに一年何ケ月――不思議でせう、善く聞いて下さい。あなた方は必要さへ了解すれば十圓の金なら即金、即金が困難なら三月拂位に持寄れるでせう。が、八十年以前の英國勞働者は極度に貧乏でして、十圓宛持寄るに事實一年何ケ月かゝつたのです。噓！　いゝえ、決して噓ではありません。當時の英國勞働者は、非常に貧乏で且つ不安な生活をし、南洋探險者は、彼等の生活はセント・ドミ

ンゴ島の黒奴に劣ると報告してゐました。又た人口四萬人のロチデール町に、何時も七千人の失業者があり、仕事をして貰ふ賃銀は、一週間に三圓か四圓でした。平等開拓者二十八名は、毎週八錢宛醵金して、十圓宛に積上げて、合計二百八十圓の資本金で消費組合を始めました。ですから一軒家を借る事は出來ません。又た二十八名が使ふ日用品の爲に番頭を雇ふことも出來ません。彼等は十二時間勞働をして疲れた身體で、交代して無給の番頭を勤めました。でも看板へは平等開拓者組合と書きました。其抱負と理想と精神とを味はずに、形ばかり消費組合の眞似をして、何んで立派なものが出來上りませうぞ。明治三十三年以來、法律と政府の力で奬勵するに拘はらず、九十九パーセントの產業組合は、失敗の骸骨を、都會と野山に曝してゐます

　ロチデール二十八職工が十圓を醵出するには、婦人が內助してゐます。ペチコートを質に置いた婦人さへあります夫が失業して已むを得ず妻君がペチコートを質に入れ、八錢の醵金を積けた涙ぐましい語草さへ傳はつてゐます。婦人も男子も、こうした意氣込で準備をしたには、餘程の理想と目的とかなければなりますまい。

　ロチデール二十八職工が消費組合を相談する時、左の目的を掲げました。

　本會の目的は各人より一磅を醵出して次の計畫を行ひ、十分な資本を蓄積して會員の財產上の改善を圖り、其社會上と家庭に於ける地位を向上せんとします。

一、食料品や雜貨其他の物品を販賣する店を開設すること

一、會員の爲に家屋を建築し又は購入すること。

一、會員中の失業者を收容して各種物品の製造を開始すること。

一、土地を購入し若くは借入れて會員中の失業者等をして耕作せしめること。

　彼等の掲げた此等の目的は學者や思想家から見れば、つまらないかも知れません。が、彼等貧乏な勞働者には、恐しい深山を平等に切り開いて、幸福の光明を地上に實現する喜びの唯一の方法であつたのであります。ですから彼等は自ら平等開拓者組合と名乘りました。之は彼等の理想であり目的であり、精神であります。然らば之を實現する實際の設計圖面はどうでせう。

　二十八職工は、彼等の仲間の中で頭の善いホワース君の

提案を承認しました。其提案は左の通であります。

一、販賣は絶對に現金とすること

一、賣價は一般小賣相場とし決して廉賣せぬこと

一、出資金に對しては年五分の利息を支拂ふこと

一、組合の利益は組合員各自の購買高に應じて配當することとし其配當金高が五磅に達する迄は組合へ保管し、五磅に達した時は其組合員の出資とすること。但五磅以上の配當金は組合員の自由選擇により出資又は現金拂とすること

一、組合利益の一切を組合員の教育資金とすること

一、從業者の過失による組合へ損失を生ぜしめた時は當人をして辨償せしむること。

一、組合に對する發言權は各組合員平等とすること。

二十八職工は、斯した設計の圖面を、確實に實行しました。其結果ロチデールの組合へは、黃金の洪水が襲來し、彼等は安い家屋を建て、立派な店舗を作り、又た學校や圖書館を設けました。彼等は恐しい奧山を開拓する模範であります。各地で其模範によつて、立派な消費組合が設けられました。聯盟することの必要を感じました。生產工場を建て、農園を經營するには、單獨組合ではできません。聯盟は彼等の揭げた理想と精神が必然に要求する處であります。ロチデール組合の組合長ギリーンウッド君の努力によつて、千八百六十三年有名な卸賣共働組合聯盟が組織されました。ギリーンウッドは聯盟の利益を左の通りだと提言しました。

一、代理者の努力に依り最も安價な市價に到り物品を購入するが故に、各組合の仕入は從來よりも有利になります

一、小組合及び新に設立される組合は直に大組合同樣の有利な地位に置かれます

一、各組合の有利は均一となり組合員に對する分配も給合の積立も平等に增加します

一、各組合は現在よりも小資本で經營し得ます

一、專門の仕入係が買入を取扱ひ一人が數百人の代理をしますから非常に經費が省かれます

而して各組合は即賣聯盟の旗幟の下へ資本を持寄り、現在では百八箇所の大工場と、南阿及び錫蘭島等の大殖民地と多數の汽船とを有し、又た銀行部や保險部なども設けられて十數億萬圓の資本を管理してゐます。が、二十八人の

職工が十圓宛持寄つて、妻君がペチコートを質に置いて出來たものであります。

彼等の組合は日用品の賣店を設けました。ですから我國では彼等の運動を消費組合と名げますが、彼等自身には賣店は手段であり、目的は工場と殖民地と家屋と生產組織の合理的改造でした。彼等自身は彼等の運動を共働運動と名けてゐます。ですから私共が東京で消費組合を創立した時には共働社と命名しました彼等の目的と理想を忘れん爲めであります。だのに、形を眞似して理想と目的を知らぬ人々は消費組合だとか、購買組合だとか、協同組合だとかと名乘つてゐます。目的と精神のない、嗚呼九十九パーセントの人々よ男子よりも婦人は純眞だと思ひます。日本男子の失敗を、どうぞ婦人によつて取返へして下さい。決して情實に拘泥せず。飽く迄理想の火を胸に燃やし、出資、現金賣小賣相場、廉賣せぬ、組合資本の蓄積、資本の社會的利用、こうした設計を假令ペチコートや着物や指環を質に置いても實行する、婦人に其決心があれば、共働組合運動は必らず美はしい花を咲きます。でなければ、姉妹方の努力も、九十九パーセントの骸骨となります。もし姉妹方の努力が、多勢から贊成されなければ、多勢の人間精神が間違ふてゐるからであります。その時には間違ふてゐるからであります。その次には間違ふた人間精神を直す爲に、他力本願の東洋信念を打破する自力覺醒運動として、私が最近に說き廻つゐる、自然科學に立脚する美教といふ、新宗教の骨髓を話しませう。

野良に叫ぶ より

澁谷定輔

野良の喜び

――まあ、どうだい
實におらが芋は素晴しいぢやないか
――陸稲もどうだい
素的にでつかい穗が出たぢやないか
――うん、粟の穗だつて!
――もう四五日で豆はひけるぜ
今 俺と弟は
すつきりと晴れ渡つた大空の下に
ぽつちりと二葉芽ぐんだ大根に手ぐれをくれながら
陰慘なうちのことも忘れてたゞ作物の實のるのを喜び語つてゐる

親爺よ

――たとひ小作米をまけて貰つたつて
自分一人ぢやあるめえし
そんな事で暇を欠いたり心配したりするよりや
繩の一房もよけいなつた方がよつぽどましだ
(俺が爭議のために出かけやうとすると
親爺はさう、いつも云ふ)
――その嗄がれた聲は
永い虐げに腰が拔けた
悲しいあきらめの吐息そのものだ

だが親爺よ
不幸なことに
俺にはそいつが出來ねえんだ!
(俺の血が、魂が許さねえんだ!)
たとひいのちを奪はれるとも!

俺は獨りで繩をない乍ら
忠實に働いて働きまくり乍らも
只『米の飯をくいたい』と云ふことを人生最高の理想として
遂に一杯の米の飯に舌づゝみも打てないで
一個の米作機械として死んでゆく
多くのきやうだいのことをまた親たちのことを
次から次へと考へるとだ
俺の魂は火のやうに嵐のやうに燃

え立つて
どうしても飛び出さずにはゐられ
ないのだ

農繁期の夜更

何にも彼も何もかも
無茶苦茶だ
野良と疊におひまくられて
夜業のあとの
目藥ばかりの俺の時間も
すつかり奪はれてしまつた
大根の花の白い夜更け
月光にひかる葱坊主
おめえ等は暇でいゝなあ——
（東京神田區淡路町平凡社發行）

貧しき母

中川一政

人はなべてかなし
さ夜ふけし夜のみち
米何升を買ひてかへるもの
あにわが母のみならんや

われはけふ
しほ鮭のひときれを
買ひてかへるまづしき人をみたり
顏あをざめて
この世にいまは爲すことなきが如
けれど
背には子を負へり
何も知らざるおさな兒よ
汝の母の背はあたゝかくして
汝が母のくるゝものはうまきかな

ねむれ、いとし兒
みちたりて
ねむれいとし兒

なが幼兒なる日
母は世にも貧しきくらしをなしつ
ゝ
なをそだてあぐるなり

すべて人は勞苦す
すべてのものはみな悲し
されど子を守る母はありて
をのれひときれの鹽鮭を
紙に包みて買へども
なほ世のどん底に
死なせずしてとらふる力あり
なほ世のためになさしむるなり
いとほしめ汝が兒を
おのがじじ
わが兒を負へる
ちまたの母の涙ぐましきかな

（『見なれざる人』より）

新社會と家族制度

山川菊榮（譯）

これは勞農露國のアレキサンドラ・コロンタイ女史のパンフレットの中から譯出されたものです。前にも後にも、もつと長く書かれてあるのですが、編輯の便宜上、中の三章だけをのせました。

婦人勞働と家庭

現在の家族制度も過去の遺物の一つにすぎない。曾ては牢固な、堅實な、崩壞し難い—僧侶によつて聖化された結婚はさういふものだと思はれてゐた—ものであつた家族制度は、その全ての成員にとつて等しく必要なものであつた。家庭がなかつたなら、誰が子供を養ひ、着物を着せ、彼等を仕込んだであらうか。誰が子供らを教へ導いたであらうか、その時代の孤兒の運命ほど悲慘なものはない。吾々が見慣れて來たような家族生活の下に於ては、稼いで妻子を養ふのは夫である。妻は妻で家事と育兒に沒頭してゐる。けれども既に一世紀も前から、此習慣的な家族生活の形は、資本主義の榮えてゐる全ての國々、工場が勞働者を傭ふ他の資本家的企業と共に急激に增加して來た國々では、どし〳〵破壞されて行つてゐるのである。家族制度の習慣や道德は、其等のものを取捲く一般的な生活狀態と同時に形づくられるものである。何よりも第一に家族生活の習慣を根本的に變へる上に力のあつたものは疑ひもなく婦人の賃銀勞働の普及であつた。曾ては一家を支へるものは男ばかりだと思はれてゐた。ところが過去五六十年來ロシアでは、(他の國々ではそれより幾分早くから)、資本家制度が婦人を驅つて家庭の外に、報酬を伴ふ仕事を求めることを余議なくさせたのである。

「扶養者」である男子の賃銀では一家を養ふに足りないので、妻も收入を伴ふ仕事を探さねばならなくなつた。母親も工場や事務所を訪はねばならなくなつた。そして或は工場勞働者として或は日傭女として、洗濯婦として、賣子として、事務員として、家婢として働くために家庭を出る勞働階級の婦人の數は年毎に、日毎に增加する一方である。

大戰前の統計によれば、ヨーロッパとアメリカとを通じて自己の勞働によつて生活する婦人が約六千萬人に達してゐた。戰時中に此數字は著しく增大

した。是等の婦人のうち約半數は結婚してゐる。けれども彼等の家庭生活がどんなものであるかはたやすく想像ができる。妻たり母たる人が一日八時間往復時間を通算すれば十時間も家の外へ働きに出かける家庭の生活！ その家庭は全然投げやりにして省みられない。子供は少しも母親の世話を受けることが出來ずに育ち、年中獨りぼつちで、大部分の時間を街頭で過し、そこに集まるあらゆる危險に曝される。勞働者にして妻であり、母である人々は三つの仕事を同時に果たさねばならぬために血の汗を流してゐる。さういふ婦人は、夫と同樣に必要な勞働時間を工場に或は商業的企業に與へ、次に出來得る限り忠實に家事を仕末し、更に子供の世話をしなければならないのである。資本主義は婦人の肩に、彼女を打ちひしぐ程の重荷を負はせた。それは主婦として、母としての重荷を減らすことなしに、婦人を賃銀勞働者とした。そこで吾々は婦人が三重の背負ひ切れぬ重荷に打ちひしがれ、忽ちに打消される苦痛の叫びを屢々擧げ、一再ならず涙を流すことを余儀なくさせられてゐる有樣を目にしてゐるのである昔から婦人の運命には勞苦がつきものであつた。けれども工業がその全盛時代にある今日、資本家の軛の下にある何百萬の勞働婦人ほどに悲慘な運命を經驗した者は未だ曾てなかつたのである。

婦人勞働が普及すればする程、家族生活解體の過程は進行する。夫と妻とが一つ工場の別々の部門に働く家の家庭生活とはどんなものであらう！その家庭では、妻は子供のために適當な食物を調理する暇すらない。父と母とが一日二十四時間の大部分を激しい勞働に過して、子供らと數分間すら遊ぶ暇を持たぬ家庭とはどんなものであらう昔は決してかうではなかつた。一家の女主人たる母親は家庭に留まり、家事を營みながら、子供から注意深い目を離さなかつたものである。所が今日では、朝早くから工場の汽笛の鳴るまで勞働婦人はその仕事に急ぎ、夕方になると、再び汽笛の音につれて彼女は家へ歸り、一家の汁を煮、一刻も放つておかれぬ家事に手をつけるのである。そして碌々眠らぬうちに早くも起き出して、また毎日の苦しい務めを繰返さねばならぬ。この世帶持ちの勞働婦人の生活こそは、眞に勞役所そのである隨つてかような狀態の下に家族同士の團結が緩み、家族制度そのものが解體の度を進めてゆくことは毫も怪むに足りない。曾つて一家族を牢固な一團體とした全てのものは、その堅固な土臺と共に、徐々に消滅しつゝある。家族制度は國家にとつても、家族の成員にとつても、もはや必要ではなくなつて來てゐる。古い家族制度の形體は單なる障害物にすぎなくなつて來てゐる。

過去の時代に、家族制度を維持して來たものは何であつたか。それは第一には家族を養つたものは父と夫とであつたといふ事實、第二には、家庭が家族の全ての成員にとつて等しく必要であつたといふ事實、第三には子供は兩親によつて育てられたといふ事實に基づくものである。

今日ではそれはどうなつたか！

前に述べた通り、夫はもはや家族の唯一の扶養者ではなくなつてしまつた働きに出る妻は、此點では夫と對等のものになつた。妻は自分の生活費を稼ぎ、屢々子供や夫の生活費までも稼ぐことを覺えた。それでもまた子供が幼ない間はそれを養ひ育てるといふ仕事が家庭に殘つてゐる。が、この仕事すらも徐々に家庭から離れて行つて居るのではあるまいか。

主婦の生產的勞働

都會でも農村でも、貧しい階級の婦人の全生活が家庭の內部で過された時代もあつた。婦人は自分の家の國から一歩外のことは何一つ知りもせず、知らうともせずにゐた。その代りに、婦人は自分自身の家の中に、單に家族のみならず、國家全體にとつて最も必要で有用な種類の、ありとあらゆる方面の仕事を持つてゐた。彼女は今日の勞働婦人又は農婦が皆やつてゐる仕事を全べてやつてゐた。彼女は料理もすれば洗濯もする、掃除もすれば裁縫もし繕ろひ物もした。なほ其上に彼女は今日の婦人がもはやしないでも濟んでゐる數多くの義務を果さねばならなかつた。彼女は羊毛や亞麻を紡ぎ、布や衣裝を織り、靴下を編み、レースを作つた。そして彼女は、家計が許す限り、釀したり、燻したりして貯藏用の食品を作つた。又彼女は家族の飲物を釀し蠟燭をも造つた。昔の婦人の仕事は何といふ多種多樣のものであつたらう！吾々の母や祖母はさういふ生涯を送つて來たのである。今日でさへも鐵道や大きな河川から遙かに離れた、極く邊鄙な片田舍では、一家の主婦が、大都會や賑やかな工業地方の勞働婦人が夢にも想ひ設けぬほどの苦しい勞働を負はされ、舊い時代の生活樣式をそのまゝ留めてゐる小さな部落があるのである。

吾々の祖母の時代には、此家庭の仕事の一切は絕對に必要な、有用なもので、それによつて家族の生活が維持されたのである。一家の主婦が是等の義務を忠實に果せば果すほど、家族の生活は向上し、秩序と富とが保たれたのである。婦人の此主婦としての活動から國家さへも利益を得たのである。何故なら昔の婦人は、單に自分の手で、又は家族の手で馬鈴薯のスープを作ることだけに甘んじてゐた者ではなく、布や糸やバタのやうな、多くの生產物を作つたのである。其等はすべて市場に商品として提供せられ、隨つて實物

として、價値ある物として考へられたのである。

吾々の祖母や曾祖母の時代に、彼等の勞働が金錢に見積られなかつたのは事實である。けれども職人にしても農夫にしても、全て男子は、今でも諺に殘る通りの『黄金の手』を持つた婦人と妻に求めたのである。それといふのも、「婦人の内職」なしで、男の稼ぎだけでは未來の一家を維持して行くことが出來なかつたからである。然し此點では國家も、國氏も、家庭も夫と利害が一致してゐた。家庭の中で婦人が働けば働くほど布、皮革、羊毛等あらゆる種類の生産物が造られ、それの剩余物は近處の市場で賣られた。そして斯ようにして國全體の經濟的繁榮が增したのである。

家庭の義務の減少

けれども資本主義は斯ような舊い生活樣式を一切變へてしまつた。曾て家庭の内部で生産された全ての物は、今日では工場や職場で大量に製造される機械がまめに働らく妻の指に取つて代つた。今日なほ蠟燭を作り羊毛を紡ぎ布を織る主婦が何處にあつたらう？さういふ品物は全て、近處の店で買ふことが出來る。以前は、若い娘は皆な靴下を編んだものである。今日、自分の靴下を編む若い女工を見かけた者があるだらうか。第一、彼女にはそんな時間がない。時は金である。誰も不生産的に即ち、利益にならぬ方法で、金を使ふ者はない。今日では、主婦であつて同時に勞働婦人である者はすべて靴下を自分で編んで余計な暇つぶしをするよりも、出來合ひの靴下を買ふに極つてゐる。すぐ隣の雜貨店に陳した果物や糖菓を賣物にしてゐるのに、自分でさういふ物をわざ／＼作る勞働婦人はめつたにあるまい。店で賣つてゐる物は品質が劣つて居り、工場で出來る糖菓は世帶持の上手な主婦が家庭で手づから作る品物には及ばずとも、勞働婦人はもはや自分の家庭のためにさういふものを相應に作るたけの時間をも力をも持ち合せてゐない。彼女は先づ第一に、家事を閑却することを余儀なくされてゐる賃銀勞働者である。兎も角も、現在の家庭は、吾々の祖母がさういふもののない家庭を想像し得なかつたような全ての家庭勞働から益々多く解放されかけて居る。曾て家庭の中で生産されたものが、今日では工場や職場で男女勞働者の共同の勞働によつて生産される。

家庭はもはや生産せずにたゞ消費するのみである。今日なほ主婦の手に殘つてゐる是非必要な家事は、掃除（床の掃除、塵をはたくこと、溫房、ランプの世話等）料理（食事の世話）洗濯、家族の肌着や被服類の世話（かゞることや繕ろふこと）の四種だけである。

是等は苦しい、骨の折れる仕事である。是等は勞働婦人の全ての時間と精

力とを奪ふ上に、彼等は更に工場で勞働する時間を捻出しなければならぬ。けれども吾々の祖母の仕事はまだ〱これしきのものでなかつたことは確かである。のみならず、祖母の時代の家事には、今日の勞働婦人の家庭勞働には全く缺けてゐる性質が含まれてゐた今日の家事には、國民經濟の立場から國家にとつて有用な性質が全然失はれてしまつた。何故なら其等の勞働は何等の價値をも創造せず、一國の繁榮に何等の貢獻するところもないからである。

勞働婦人は朝から晩まで、家を掃除し、肌着を洗濯して火のしをかけ、使ひ古した布をキチンと仕末しておくために全力を盡し、乏しい財布で出來るだけ氣に入る食物を作らうとして骨身を碎いたところで、夜になつて見れば一日中の仕事が何一つこれといふ結果を殘してゐない。その休みを知らぬ手で市場に於て商品と看做さるべき何一つも作つてはゐないのである。勞働婦人はたとへ千年生きてゐたところで、何も變りのある筈はない。暖爐の棚には永久に新しい塵が積り、夫は永久に毎夜空腹を抱えて歸り、子供らは永久に泥靴で上つて來るであらう。………主婦の仕事は日毎に無益になり、益々不生産的となりつゝあるのである。

個人主義的な世帶はもはやその絶頂を過ぎた。それは益々集團的な世帶によつて取つて代られて居る。勞働婦人は早晩自分の住居の世話をしなくとも濟むようになるであらう。來るべき×××の社會に於ては、これは他に何もしない專門の勞働婦人の仕事となるであらう。金持の妻はさういふ苦しい骨の折れる仕事から疾に解放されて居る何故勞働婦人だけがさういふ苦しい仕事を續けねばならぬだらうか。ソヴィエツト・ロシアに於ては、勞働婦人の生活は、在來金持階級の婦人のみを取りかこんでゐたのと同じ安樂、爽快、及び衞生法を以て取まかれねばならない××の社會に於ては、誰でも自由に行つて食事を執ることの出來る公共食堂及び公共調理所があるであらうからさういふ社會では、勞働婦人はもはやその僅かな、實に余りにも僅かな余暇を食物の仕度に費す必要はないのである。

全ての國々を通じて、資本主義の下に於てさへも、是等の機關は既に大に增加して來た。約半世紀の間に、ヨーロツパの全ての大都市のカフエーや食堂の數は日毎に增加した。それは秋雨の後の菌のように簇生した。けれど資本主義の下に於ては、財布の重い人の外、レストランで食事をすることは出來ないに引きかへ、××××都市では誰でも中央調理所やレストランで食事をすることが出來る。洗濯その他の仕事の場合も同樣である。勞働婦人はもはや汚れものに取りかこまれてゐるに

も及ばず、靴下をつゞくつたり肌着を繕つたりして目を痛めるにも及ばない彼女は毎週そういふものを中央洗濯所へ持つて行き、次の週に、すつかり洗濯して火のしのかゝつたのを受取つて來ればよいのである。これで勞働婦人の向側が一つ減る譯であるが、更に被服修繕所のお蔭で勞働婦人は、夜の時間を今のように苦しい勞働に費す代りに、有益な讀物、健全な娛樂に費すことが出來るようになる。であるから上に掲げたような、今なほ婦人を壓迫してゐる最後の四つの義務も亦た、勝利を得た×××の社會では程なく消滅してしまふであらう。そして勞働婦人は決してこれを嘆くようなことはあるまい。××××の社會は、婦人の家庭の軛を斷ち切つて、その生活を一層豐富な、完全な、幸福な、自由なものにしようとするにすぎないのである。

澁谷定輔氏より

私は、あなたが九月號に書かれた「御油にゐて」の中の小作爭議と娼妓に就いて、少しばかりお書きになつてをりましたが、あれこそ、もつと〳〵深く探ぐらねばならぬ、婦人解放運動の原因であると思ひます。

× ×

私は、婦人運動に、農村婦人、殊に農婦がもつと〳〵と問題にされなければならないと絶えず願つてをります。娼妓も、女工も、職業婦人の問題も、皆農民婦人の解放のないところに解決する理由はないと思ふてをります。(いづれそのうちに、このことに就いて一文をものして送らうかと思つてをります。)

何と言つても、農民の婦人位に人類生活の重大な生産勞働に從事してゐる階級はなく、農民婦人位悲慘な生活を强制されてゐるものはないと信じます。

× ×

最近、女工の問題がやかましく言はれてをりますが、農民の娘達が、百姓よりも、女工や、否、娼妓の生活にまでも、あこがれを持たうとする傾向こそ、眞に考ふべきことではないでせうか。

らいてう、やす子兩氏の論爭を批評す

高群逸技

婦人公論誌上で闘はされた兩氏の論爭が—といふと仰々しいけれど、色々な意味で注目されたと見えまして、私のやうな者にさへ件の論爭を批評せよといふ命令が下りました。

仕方がありません。批評はしますが、その前に一言申し上げたい。それは私共婦人といふものは批評にも被批評にも馴れてゐない。さうして何よりいけないことは、そこに尊敬の態度を缺ぐ、純正な意味での批評、被批評に堪へないで、すぐどうかすると感情に走りやすい。これはまことにさびしいことです。

尤も平塚らいてう氏などになりますと、氏の理性的な人格、それが永年の教養と相俟つて、どんな下らないものにでも尊敬を拂つてくださるであらう、しかし私共—三宅やす子氏や私—になると、そこが危ぶまれる。だからどうも困るやうな氣がします。一生のかたき同志になりはしないかといふ心配やら、何やらで、どうも私はさびしくてなりません。なぜなら私共は女同志であり仲間である。今後は一層この仲間といふことを自覺して行かなければならない。個人主義的であつてはならない。攻撃とか論難とかの場合にあつても、その底に愛が横はつてゐなければならない。

かうした意味の自覺が私共婦人、とりわけ日本婦人には缺けてゐます。すぐ對象を百年前からのかたきでゞもあつたかのやうな冷やかな目で見たがる。だから獨斷も伴へば、邪險も伴ふ。まことに厭なことです。しかし、今後はさうあつてはならない。さうしてこの今後といふ時代へ移る過渡期が今であるとすれば、多少の犠牲が出るのは必然の勢であらう。といふ意味において、私はこのペンを執る。が、なるべくなら、かたき同志にはなりたくない。

こゝらで前置を廢して批評にうつります

まづ順序として、創作品を批評する場合にあつてはいはゆる創作評でなくてはならないかどうかといふ問題について考へたいのです。

これに就て、三宅やす子氏は『創作評以外の事で評されるのは苦笑もので、創作評以外の批評は取るに足らぬ』と云ひ、平塚らいてう氏は『それはあんまり狹量すぎやしないか。それは批評するものゝ自田でありはしないか』と云ふのです。

これは、三宅やす子氏の創作を平塚らいてう氏が一般婦人の立場から批評した、それに就ての爭である。

ところが私に示はせると、批評家といふものゝ眞價および意義は、彼が創作家と對立してゐる點にある。創作家に隨從してゐる意味での批評家といふものゝ立場は、批評家の墮落であり、權威の失墜であることを意味してゐる。つまり批評家の眞價と本分は、一般民衆の代表者として作家に臨む場合にある。

歴史によつて見ましても、批評家が最もその本分を盡し得た、したがつて批評家の權威が遺憾なく發揮し得られた時代を、自

然主義文學思潮を支配したテイヌ、人道主義文學思潮を支配したドプロリユーボフ時代にあると一般に見られてゐる。いふまでもなくそこでは一般民衆がテイヌやドプロリユーボフによつて作家に臨んだことを意味してゐる。

既にかように批評家といふもの〻本質が一般民衆を代表して作家と對立する點にあるからには、それを『苦笑もの』なんかいふことは、批評家といふものがどんなものであるかさへ知らない者のゝわごとであると云はなければならない。

多少とも文學に携はつてゐる三宅やす子氏が、批評家の性質を知らないといふことはちと不見識ではないか。

三宅氏―『私はモダンガールも況んや未來の女性を豫感せしめるような暗示的な女性も書かうとしたのではない。そんなものを書いたつてつまらない。』

平塚氏―『私は事實をいつたまでゞ、だからだめと言つたのではない。あなたを知つてゐるものは未來の女性を暗示するやうな女を書くことをあなたに求めるやうなことはなからう。それでい〻のです。』

だが、私はだめと云ひたい。この『だめ』は、ふたつの意味をもつてゐる。三宅氏を作家としてだめ、婦人としてだめ、といふのである。

およそ作家には『如實描寫』といふ逃げ道がある。私は作家として如實描寫をする〻未來とか、暗示的とかそんなことはつまらないといふ。

だが、未來とか、暗示とかは、現實以外にはない。すべて現實は未來へ發展する種子をもつてゐる。

その種子を認めることが出來、またその種子の表示してゐる未來が何もの、暗示が何ものか洞察しうる作家ならば、にとひ平凡な一女性を書かうとも、それがそのま〻さうした未來を何らかの意味で豫感せしめるやうな、暗示的な女性になる。これこそ眞の如實描寫である。

ゆえに眞の意味における如實描寫の作家は、眞の意味において未來を書く作家である。

殘念ながら私は三宅氏の作品がそんなものでない、もしあれが如實描寫―氏はさう云つてをられる―ならば、まことに淺い如實描寫であると云はなければならない。

私が三宅氏を作家としてだめといふのはかうした淺い如實描寫に滿足し、未來や暗示を含む如實描寫といふことを、まるつきり考へても見ないやうな態度をである。

私は必ずしも平塚氏のやうに『あなたを知つてゐるものは未來の女性を暗示するやうな女を書くことを求めなからう』と云はうとは思はない。なぜなら三宅やす子その者の中にはあらゆるものがある。それを生かしさへしたなら、未來を書く作家に彼女がならぬとは云はれないからである。それを彼女は見よ、うすつぺらな如實哲學に滿足し、自分を生かさうとしない。だから私は彼女をだめと云ふ。

さてこんどは婦人としての三宅氏である私共は手を取り合つて行かけければならない。仲間といふことを自覺しなければならない。だがいつたい三宅氏には、仲間といふ意識があるだらうか。

否。彼女は云つた『未來を暗示する女性とんなものを書いたつてつまらない。』しかし、私共にあつては、未來を暗示する女性や男性に意義がある。なぜなら私共被支配者には未來が世界だから。

一個人の場合にあつては、妥協してなり何なり、生きる道はある。だが全體の生きる道となつては、徹底的な未來を考へずに何が考へられよう。

三宅氏にあつては、いつも問題が、そして視野が、個人主義的である。私共の集團といふことに對し、まるつきり無關心で無智らしい。だから婦人としてだめと私はいふ。

もうだいぶん書いたやうですが、そして疲れましたが、どうしても玆に多少なり書かなければならないことがある。

それは、らいてう氏とやす子氏との戀愛觀の相違、母性愛觀の相違に就てである。

らいてう氏が戀愛の純潔を極端にまで欲求されるに對し、やす子氏は、

『戀愛三昧に入り得る男女はたしかに幸福である。が然 、戀する女が人の妻であつた場合、或は人の良人であつた場合、氏の讃へられるような戀愛の自由の境地は拓かれない。愛するものが愛する者と住めない時に、戀は詩になつて高調されるではありませんか。』といふ。また

『淳子は私の好きな女性』といふことから察して見ても、三宅氏に多少なり、いはゆる詩―束縛の中にあつて不徹底な戀をする―を好むおもむきのあることを否定しがたからう。が、本來戀といふものは、

戀の道は
二つの心に一つの喜び
二人の愛は一つの愛
歎きも一つ歎き
執れかゞ他より離れ去ること更になし

と云ひ、

二つの心一となり
彼らの戀衰へざる間は
何人もそを破る能はじ
二つを裂くものは唯死あるのみ

と云ひ、

君を妾に妾を君に
結ぶ緣は世の末までよ

と云ふやうなもの、もしふたりが引き分けられたなら、そこには多くの詩?―だが彼女は詩を好まない。それは彼女の不幸だから―が生れる。

戀は本來かうであつて、詩を好まないものであるが、三宅氏の場合にあつては、それが好まれ、さうしてしかも、僅かな障害―戀にとつては―が生み出す詩でそれがあるらしい。

つまり玆には戀はない。だから詩でそれを作り出してゐるやうなふうである。いづれ、上中流階級のあそびの一つであらう。

しかし、私は玆で三宅氏の戀愛觀を確定的に批判することができない。なぜなら、『小說や戲曲で戀愛生活描寫に力こぶを入れてかいたつて誰も面白がらないから』と氏は云つてゐるし、從づていゝ加減なものであるらしいからである。

さて最後の問題は、母性愛觀である。便宜上、またお二人のお言葉を拜借する。

『可愛いくてたまらないから、世話をしたり、教育をしたりしてゐるまでゞ、しなけ

ればならないからしてゐるのではない。子供のために自分が犧牲になつてゐるとはあまり思つたことがない。といふやうなことを云つた私に對して、三宅氏は私は愛ばかりでしてはゐない、責任感からだとおつしやつた。』―平塚氏。

『本能で子を愛するといはれるらいてう氏と、責任感で愛すると云つた私の心持には說明しても氏にはわからないと思ふから、ある小學校の先生の言葉をこゝに擧げておく。

『天下の教育をどうするといふ前に先づお前のクラス三十人の子供を考へよ。三十人の子供を考へる前に先づ一人の子供を思へ更にもつと根本的なことは自己の姿を凝視することである。そこから凡ては始まる。

あゝこの冷汗をどうしよう。

此責任觀念こそ、私の母としての責任觀念と共通である』―三宅氏。

これで見ると平塚氏の母愛は責任的な母愛で、三宅氏の母愛は責任的な母愛である

なるほど此れは二つの相反する母愛である。平塚氏が『生かす』にあるなら三宅氏のそれは『育てる』にある。

自然愛は、標準をもたない、たゞ、子供化することができる、といふのは、絶對的な信賴を子供の生長にもつ、彼らの生長こそすべてのものである。

責任愛は、標準をもつ、それは、より善く育てるといふのである。だが、より善くとは何か、こゝに迷ひがある。三十人の子供よりは一人の子供を、一人の子供よりは自分自身を、かくて冷汗が流れほとばしるが、しかし此の教師は、いつまで自己を見つめ、どこまで自己を引上げたらよいかより善き自己とは何ものか、子供を導くとは何か、子供を導くに價する自己とは何か？

結局彼は、ぐるぐる廻りをするだらう。さうして、その揚句に、すべてのかうした心構へを拋棄することによつて、彼は初めて救はれるであらう、といふのは、自然に對し信賴することである。

育てる教育から生かす教育へ、心構への教育から信賴の教育へ、これは教育史の辿つた道である。

近年に至つて、自然教育、自由教育の思潮が愈々益々教育界を風靡しつゝあることさうしてそれが將來においては必ず何らかの形式を以て一般化するであらうことは、最早や少しく教育界の事情に通じたものなら肯づく筈である。

つまり母親の愛であるところの、自然的愛が教育にあつて最も重要なもの、根本的なものとされてきたのです。

これらのことから考へても、將來にあつて一層すべての意味において進步した母親達は、その愛情において、生活において、『實質的には違つてゐる、だからそれだけ深刻な意味をもつ意味での原始的形式へ立ち還るであらう、』といふことが考へられます。





英國婦人ギルドに就いて

村山重忠

一

英國婦人ギルドは、今を去る四十一年前に設立されたものであつて、現在一千有餘の支部と一萬八千六百人の組合員を有ち、而もその各支部の組合員は大概婦人勞働者であつて、其の組織體の指導者なのである。而して婦人否母性主婦としての有らゆる利益を代表する。即ち婦人達が實際に經濟生活に於ける自己の新境地を充し得るに必須な教育を與へんとして居る。換言すれば婦人達の要求を認めしめ婦人達の協同組合運動に對する關心を目醒さしめるやう教育せんとする團體運動である。例へば、往年に於て見たる如く、國際的協同組合の取引とか婦人の男子に對する賃銀平等の要求等、特殊なテーマが年々提案されるのである。

而もギルドは、完全に獨立獨歩その仕事を遂行して居る。ギルドこそ、英國婦人達が凡ゆる問題に於て公生活を歩みその社會的權利と義務とを一新する、偉大にして而も頗る効果多き組織である。然らば、かゝる組織は、爾來如何なる經過を踏み來つたか。即ち如何にして現在の如き偉大なる組織を形成するに至つたか。

二

抑々此の婦人ギルドの歷史の根源をなすものは、かの『婦人同盟』である。而して此の婦人同盟の創始者であり生みの母とも云はれる人は、アーサー・ダイク・アークランド夫人(Arthur Dyke Acland)である。

一八八三年の始め、『協同組合新報』(Co-operative News)に特殊面が婦人達のために設けられたのであるが、

アークランド夫人はこの新聞に於て『婦人同盟』の照會をしたのである。夫人は此の新聞に記して曰く『……此の同盟は我々のために維持するものであつて、此の同盟に於て始めて全國に向つて我々の心身を吐露して主張することが出來る。來り求めよ！』と。又、ローレンスン夫人(Lawrence)は曰く『我々の協同組合的婦人ギルドは設立された。恐らく我々の空中樓閣の夢が現實化されたものである』と

一八八三年六月エディンバラに於て開催された協同組合會議には、ギルドも始めて參加したのである。此の時組合員數は十四から五十に增した。かくしてギルドの根は、此のアークランド夫人及びローレンスン夫人によつて植付けられ培はれたのである。爾來二十一年の間にその『舊い秩序』は改革され、機會ある每に新な義務が創られ、只に婦人に對する利益の爲めのみならず且は全人類の安寧のために迄從來豫期しなかつた義務を以て結ばれたのである。

最初十年の間はギルドの組織の準備期であつた。一八八三年の末三箇の支部が構成された。此の支部はやがて被服燃料、救貧等の如き各種の俱樂部を建設し始めた。

一八八四年六月『婦人同盟』内に於て始めて小さな年報と貸借對照表が印刷された。

一八八五年同盟の名稱が變更され協同組合婦人ギルドと改稱された。之が現今英國に於ける一權威として認められて居る婦人ギルドの誕生である。爾來四年間、マリー・ローレンスン夫人がアークランド夫人の後を繼いで活躍した彼の女はラスキンの後輩であり、基督教社會主義の熱心な嘆美者であつた。彼の女はギルドに對し充分な期待を持つて居つた。殊に彼の女は幼年者而も少女に關して考究しやうと試みた。且つ又、婦人連をして協同運動の意義を知らしめその間に一の社會的な交易を行はしめんとする努力に附隨して、その眼をば少女の仕事場及び幼稚園の設立に向けたのである。かくて一八八五年には、ウールウキッチの教育委員として選擧され、續いてオールドハムに開催された協同組合會議の代議員として派遣された。此の頃には支部の數は五十に增加し、現在のギルドの基礎が確立されたのであつた。

一八八六年には、兒童教育を協同組合の基礎に立つて行ふことを協議した。

一八八九年は、ギルド組織内に於て最も著名な進歩を見

だ年である。即ち支部が六箇の區廳に分割されたことである。

一八九二年には、マンチエスターに於てギルド第百支部建立の祭が催された。而して同年に於ける組合員數は四千五十人を算した。而して此の頃に至り漸くギルドの財政狀態が改善された。

此のギルド組織が固守する原則は、自治である。此のギルドの特性は、その組合員によつて尊重され、且つ同僚であるといふ感情を深からしめる。或る者は云ふ「我々は保護後見などと云ふことは知らぬ。總てが凡て仕事に干與するのである。凡てが民主的である」と。即ちギルドと他の婦人團體との差違は、この民主主義的な原理に在る。

一九〇四年、ギルドは三百六十三の支部に、その組合員數は一萬七百に增加した。而して支部は三十四の區域に於て統制され、更に五箇の團體――セクション――に分たれた。凡て是等は組合員によつて選擧される委員によつて指導される。且つ此のギルドは、全體から見ると、七人の者からなる中央委員と、毎年行はれる會議によつて統制されて居る。而して此の毎年行はれる會議に於ては、例へば婦人選擧權、土地問題、自由貿易等が討論されたのである。又、中央委員――ギルドの土臺とも云ふべきもの――は、七人の組合員から構成されて居るのであるが、その中二人は北部のセクションから他の五人は各々他のセクションから選擧される。總監督は、ギルド全支部の間から送出される。中央委員の任期は可成り組合員間に論議されたところであるが、現今三ケ年を以て任期期限として居る。而して此の中央委員は、年五回集會するのを以て常例とする。

ギルドの政策及びその方針は、中央委員の掌中に於て取り定められる。

一九〇八年から一九一二年に亘り、婦人勞働者の最低賃銀要求の宣傳が協同組合に於て行はれた。此の時ギルドも之に贊同し、英國購買組合中央會並に地方的協同組合も共に此の最低賃銀制を承認したのである。又、或る時は協同組合の特質をば偏僻な都會の貧民達に知らせるために努力した。更に又、勞働組合に對し多大の援助を與へて居る。

ギルドは、各種の運動團體に對して婦人達の代表者を遣ることに努めて居る。その例に、協同組合聯盟の中央委員會には二人の組合員を參加せしめ、購買組合中央會の監督

官には二人の組合員を送つて居る。一九二二年には協同組合の管理局に二百四十一人を、教育會議に七百六十五人を遣つたのである。而して是等の會議等によつて決議された議事の寫本は國會に提出されるのである。其の他、ギルド員は各種の國家的地方的官廳や市會等に發言權を持つて居る。或は又、ギルド員の内十二人の者は治安裁判官に指名されたのであつた。

その他ギルドの取扱つた問題としては例へば協同組合員と勞働組合員との提携、住宅問題、救貧問題等がある。その他ギルドは、パンフレットや報告書等を發行し以て組合の意見を發表することもある。

協同組合運動は、恐らく婦人にとつて特に適合した運動と見做すことが出來るであらう。消費者としての協同組合と生産者としての協同組合とは、同一物の兩方面を構成するものである。男子が勞働者の代表と考へられるならば、婦人は消費者の代表と考へることが出來やう。ギルドの目的の一つはそれであつて、其處に婦人達が自己の心底に潛在して所有する力の感情を目醒さしめるのである。

婦人運動に對する第一の戰線は、組合運動より外に見出さるべくもない。此の組合内に存在することが婦人の使命を見出し得る唯一の方法である。

組合運動者は、等しく彼等の活動の當初に於て、友情即ち『萬人のための自分と自分のための萬人』と云ふモットーを見出し、之を組合運動の實際に於て行ふことを知る。故に組合員は相互に親密となり社會生活を確實に歩みしめて行くことが出來るのである。かくして組合員の生活程度は向上し、文化的水準は高揚されるのである。

又、ギルドの目標の一は、勞働組合を獲得することである。既に一八九一年、婦人達が勞働組合を獲得し、協同組合が之に對し附與し得る特權を示すやう試みられた。即ち如何にすれば『婦人達はその夫の勞働賃銀を増加せしめ得るか』と云ふのである。之に對しギルドの採つた方法は、組織勞働者によつて製造されぬ凡ての財寶は、之をボイコットすることであるとした。而して一八九四年には、ギルド員は其の當時行はれて居た大勞働爭議の一つに參加して勇敢に戰つたのであつた。此の事實は、勞働組合の者に一の確固たるギルドに對する尊嚴と信頼の力を與へ、此のことによつてギルドの使命をも認めさせることが出來たので

ある。その結果未組織勞働者によつて製造された財貨に對しては、一般の信用を獲得することが出來なくなり、勞働者は益々勞働組合に加入するやうになつたと云ふことである。

ギルド組合員の多數は既婚者であるが、その家庭は同時にその工場である。と云ふのは、自身紡績工場に於て働いて居るものが多數あるからである。かゝる故に、是等多數の者は常に職業生活と結合されて居る。從つて、ギルドはそのギルドの確固たる組織内に横はる力をば婦人に對し工場法とか勞働立法をより好都合に構成するために利用することは勿論である。

故に一八九四年の工場法が議會に提案された時に、ギルドは之に對し多くの修正を要求したのである。就中ギルドは過激勞働の問題に就いて誹議を唱へた。即ち、(一)工場の壓迫的規則、(二)勞働條件の改善等である。

一八九六年の集會に於ては、次の如きギルドの活動のプログラムを提出した。

一、紡績勞働者の勞働時間の低減
二、婦人に對する定時外勞働の廢止
三、紡績業法による洗濯業の關係
四、工場勞働による家庭の補償
五、婦人勞働の監督者數の增加
六、婦人を有資格醫師に指定すること
七、少年工場勞働者の年々の醫學的調査

その他大藏省に向つて重要物產に對する租稅低減の要求を提出したり、或は自由貿易促進の提案を提出したりして居る。

或は又、此の協同組合的に組織された婦人達は、勞働者及び消費者としての特別な見地から議會の選擧問題に干與し、日一日と婦人解放の根本的意義をより明瞭に認識せしむることに努力して居る。

かくの如く資本主義制度の敵と迄云はれて居るギルドの會議は、新しいよりよい世界への希望が協同組合の掌中に横へられて居るといふこと、或は勞働者が漸次に權力を獲得することを宣言して居るのである。

以上、英國の婦人ギルドは、此の世にあるありとあらゆるものの中で最も偉大な婦人團體である。而して此のギルドは常に絕へ間なく組合員の增大を計ると共に、他國にも

――例へば和蘭、瑞西等――かゝる組織體を建設せんことに努めて居る。乍然、是等の結合の根本には、常にプロレタリアの立場からと云ふことを强調して忘れない。而も尙それは生產者としての利益とか賃銀上の利益とかよりも一般的消費者に關する利益を目標とし根底に有するのである

政治運動等といふものは、或る場合を除いては婦人にとつて極く稀にしか爲されぬ運動である。乍然、此の協同組合運動は婦人である以上萬人が擧つて、その主婦であり又母である立場から堂々とその權利を主張することが出來るのである。

我國の現勢を見る時に、婦人によつて結合された團體は隨分多數ある。乍然、其等は唯親睦の爲めの團體とか或は昨今流行する所謂「文化的團體」なるものであつて、其處に何等の協同的結合意識を見出し得ない。我々の生活する現在の社會は、今や轉換期に逢會して居る。改造の秋は今である。宜しく協同的結合意識に目醒め、以て確固たる宣言をかゝげ、現今進路に惑ひつゝある婦人達を指導してよりよき社會建設實現のために一腕振ふ婦人達の出現を希望して止まない。

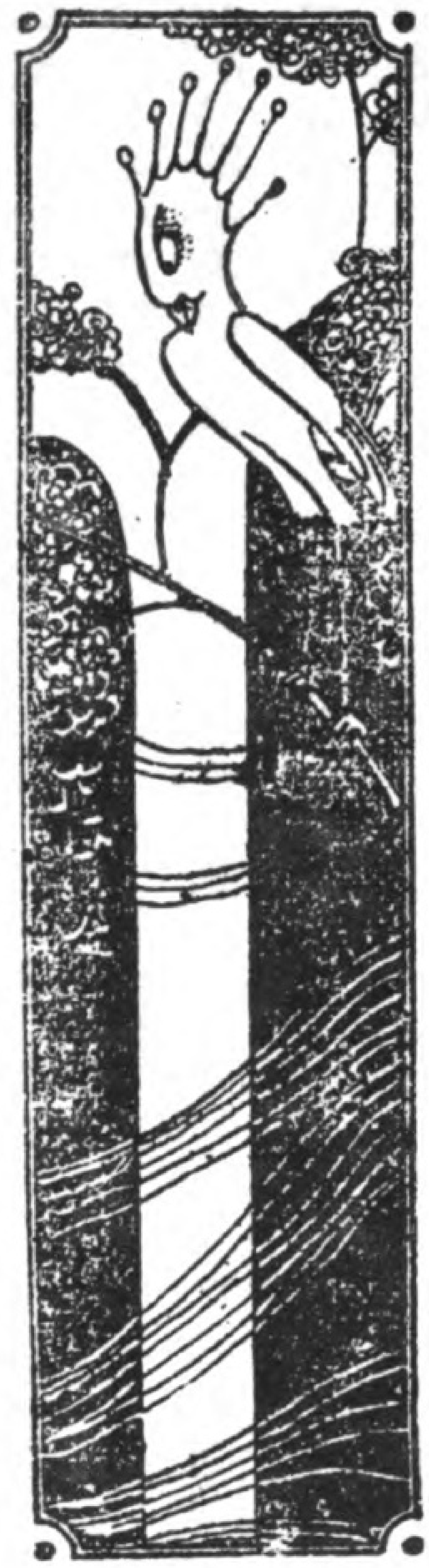
（三十八頁よりつゞく）

聖恩遍く明治の御代は、あらゆる靈山名刹は開放され、女の參拜は自由になつたが眞言秘密の奥の院には、銘酒屋が出來白首が靈域に跋扈する一足飛びの世が展開された。慾の皮のむけた人間と無智な女は眼前の勝者になつて居るのだ。

虛僞と鈍亂とは、絕間なく私達の眼前に錯綜する。さもあらばあれ、三百九歲の天壽を保ち歷代の天皇の御歸依淺からざりし高德の仙人に、尼の行道の哀話を殘させる時代の相は、そも〳〵何を語るであらう。

精進堅固と言ひ度くない。戒律に嚴なるためと稱へ度くない。聖の道は、左樣に狹隘なものではなからうに既に法體のもとの妻に非業の死を遂げさせて、それだけの傳說ですましても、何の差支へもないほど、女の價は輕いものであつたのか。女はいやしい者であつたのか。

その混迷の浮世をよそに靈鳥は、劫初來一山にたつた二羽の戀人どうしが靜かに啼き睦かに巢喰つてゐる。



西郊中野へ移り住む

奥むめお

× ×

私の蒲田住ゐは妙に落つかない一年でした。何故?と云つてこれといふ理由もないのでしたが、とにかく、一度も自分の家らしい落つきを心に持つことなしに、とやかくと一年を過してしまつた、のでした。丁度去年、引越して來た頃と同じやうに、蒲田の家の庭には、立枯れの雑草が足の踏み入れ場もないほど生繁つてゐたり、コスモスが紅く白く咲き亂れてゐたりしてゐて、眺めのいゝ頂上でしたが、私は急にこの中野へ移り住むことになりました――

「愛、雑草に及ぶ」などとよくからかはれたものですが――それ程に私は草がすきで、蒲田の家はちやうど、その草をはびこらせるにはおあつらい向きに出來た庭を持つてゐました。從つて私は蒲田の家の庭をどんなに愛したか知れません。殊に、今度の中野の家のやうに型ばかりの庭に、へうたん形の池がしつらへてあつたり、その又池の中に、島(みたい!)があつたり、橋が架けてあつたりして、妙にせゝこましい下手な人工を見せつけられてゐるのを見ると、疲れた目や心のやり場のないやうなわびしさを感じないではゐられぬのであります。然し、只、何となく落つきのいゝこの家が、とにかく當分私の住み家として、休ませてくれたり仕事をさせてくれたりするであらうと思はれるのであります。

中野の驛から、八百歩。五分位しかかゝらない近さですから、どなたもお出かけ下さい。

× ×

夏ごろから事務所を市内に持つて、仕事を、住ゐから離れた所でみつちりとやりたいと思つてゐたのでしたが、それに丁度、内幸町でビルデイングの一室を借りられるやうになつたものだから萬事都合よく運んでゆくらしいことを喜んでゐたのでしたが、こちらが愚圖〱してゐる内に借り手がついてしまいました。然し又その内空きが出

來ない譯でもないのですから、いゝ機會に、遠からず便利な地所に事務所をもつことが出來やうと思つてゐます。

事務所を持つたら、あゝして、かうして、といろ／＼仕事の上に豫定を立てたこともありましたが暫くどうすることも出來ません。その代り、この中野へ引越して來たわけに就いてお話をしませう。

私の家と同番地に消費組合西郊共働社があるのです。消費組合のことに就いては、ずつと、本誌の上で紹介をして來てゐますが、私はもう少し實際運動にも立入つて、學んでもみたいし、研究もしてみたいとかねて思つてゐました處、今度いよ／＼西郊共働社の人立ちの仲間に入れて貰つたわけなのです。

おひ／＼私の教へられたこと、考へさせられたことなどに就いて書いてゆきたいと思つてゐます。消費組合運動についてはわが國では未だ、男子の間にだけしか熱心な人がないやうですがこれは當然、直接消費を司つてゐる婦人が中心になつてやるべき仕事だと思ひます、外國などでも初めは男子に依つて企てられたやうですが、何れも、熱心な婦人の働きが加つて、はじめて大きな社會的力となる事が出來たやうです。又消費組合運動の精神は、婦人が一番で理解し易い立場にある者であるし、婦人に理解されることなしにこの運動を進めてゆくことは出來ないと思はれます。婦人運動として、この消費組合運動が一番しつくりとした、そして誰にも參加し得る實際運動であると、私に考へられます。

×　×

引越した當座はいつも、二三軒の米や酒やで物を買つてみて、中で一番安くて、良い品を賣るらしく考へられる店を調べてから取引を初めることにしてゐるのですが今度はその手數が要りません。例へば米やは――とにかく其の賣上げで家族の生活を立てゝゆかねばならぬし、貸し倒れといふものも可なり有るさうですから、その分をも勘定に入れて賣らなへでは損をするわけでせう。従つて、きちん／＼と支拂ふ私たちの米代の中には、米やの一家族の生活費と、貸倒れの豫想額とが少く共加算された値段であります。東京に米やが、百七十三戸について一軒、菓子やが七十三戸に就いて一軒の割合で店を開いてゐるさうですが、これらの米や菓子やが、凡そ百七十軒分又は七十三軒分の顧客を相手にして生計を立てゝゐるわけになるのですから、原價よりは遙かに大きいその私たちの負擔額は驚くより外ないではありませんか。

何しろ今の世の中は資本主義の世の中で、私たちが生きてゆく上に一ときも欠くことの出來ない米や砂糖や味噌やまでが、儲けやう／＼と惡鬼のやうに買手のスキを覗つてゐる商賣の手段になつてゐるといふことはたまらない

氣がします。人を見たら泥棒と思へ、といふ諺は淺ましい資本主義社會の人間根性をさらけ出したものでせうが、消費組合運動の精神は、かういふ世渡り術に疲れた私たちに、新しい生活道を與へてくれる光だと私に思はれます



有無の境

象潟葉子

私の眼前には、どれから片づけたがいゝかわからないほど、いろ〳〵な仕事が積み重なつてゐる。

ぼんやりしてゐるうちに、とう〳〵今年も八月の聲を聞いた。こんなことでは駄目、もつとしつかりおし、自分で自分を叱りつけるものゝ、何十年目とやらの酷暑に敗けかけたらしい病症を生じかけた時、私の心はすくなからず慌てだした。

死んでしまふのでもない。生殺しの體には、もうこり〳〵してしまつた、下手をすると今度だとて、暑さが烈しい丈にわかつたものでない。

病は氣から、拂ひ落してやらう。暴風雨の警報に、少し膽をひやしたものゝ、斜陽のなかを名山鳳來寺へ。豐川樣の御利益は相變らずたいしたものだ十五分おいて今から出る川合行の電車も亦鮨詰めだ。

改札口へ驛夫が出ると津浪のやうな騷動が演じ出される。うつかりしてゐると持物は叩き落されてしまふ。我先へと車內へなだれこむ。何分間もぼんやりと改札口に居ることのできない私は、いまだかつて一回も空席にありついたことがない。

新しい割合に可成り震動の烈しい電車に、卅分からの立往生は、あと六時間、しつかりと働いて來なければならない時など、身に泌みる。見渡せば腰かけてゐる乘客の大部分は男の人だ三人分が二人に分割されてゐることが甚だ多い。老人でも子供を背負つた婦人でも、後の雁はやはり敗者なのだ。吊皮に下らなければならない因緣なのだ。時は代り乘客は變つても、相變らず大股の人が大勢ゐる。惡氣はなからうがあの膝が、交通道德心のにぶい膝が、怨めしい。

力では到底座席はとれない私だ。仕方がないのである時、七八人並んだ男の群の端の一人にお時宜をした。

『奧へ參りますので誠に相すみませ

んですが…………。
流石にいゝ顔はしないが、膝くりをしてくれる。
が今日は弟のとつてくれた席で、雜誌を讀みながら一人旅の出來事を、思ふとしもなく思ひ浮べた。
あなたが女で、まだお年若だからですよ。もう廿年もだつてごらんなさい
少しづゝ、社會に働かして頂げるやうになつてからのことを物語した時、謹嚴なN氏の微苦笑の唇をもれた一句は、これであつた。
そうかもしれない。
美人には緣遠い私が、雛くちやになつて、よれ〳〵の服裝でもして居つたら、もつと叮嚀に、もつと幾度も懇願でもしなければ、私の腰が曲つてない限り、おそらく素直に座席を割愛してくれる人は寡いであらう。
女であつて、年若だから。
私は此の一句の內面を嚙みしめる、私の見た範圍でも、ずいぶん氣の毒な境遇の婦人がある。
が年若なうちは、お時宜を一つすれば、どうやら餘分な辛棒をしないでも道中の出來る心安さが、不知不識月日を重ねさす。そして若さには蔽ひきれぬ未來に對する憧憬がある。諦めたと思ふ心の奧には、まだ〳〵諦めきれぬ來世への執着がある。ほのかな光明もある。
若さの涙には苦味がすくない。折角浮びだした醍味も、若さの持つ夢に、結局流されてしまふ。
いろ〳〵なことにごまかされて、最を迎へてゐる私達ではあるまいか。
けれども時代がついたからとて、ものみなが折紙つけで珍重される、骨董品にはなれる譯がない。
捨てゝおけば、石には苔がはえる。刀物には錆がつく。人間にも黴が巣喰ふ。そしてうかばれぬ身心は墓石の彼方へいやでも崩られてしまふのだ。
苔がついたらその儘の相を新に賞翫され、黴ができたら酵母となれる人生が望んで望まれず、描いて描き出されぬわれ人の世に私の心はいつも涙する

×　　×

海拔六百六十キロメートル突兀たる巖山の頂上は、なま暖かな東風が吹いてゐる。懸樋の水も、遠くで耳を樂しませておくほうがよかつた位の、なまぬるであつたが、千四百からの九折の石階を、學生二人の足にて同行させられた私の、渇を癒すには充分であつた。弟と友達のYは毛布包や食糧包を、ほつかりだしたまゝ、飲んだり顏を洗つたり肌を拭つたり涼をとるに餘念がない。ほんとにいやに蒸し暑い夜だ。
ほかに婦人はゐない。裸體で居ろうよ、いやに今夜は紳士ぶつでるぢあないか。
シーツ、また啼きだしてよ、ほら
佛法僧の聲が聞えだしたのだ。麓の檜林で聞いたのはかすかなが、さながら圭を叩くが如き、單調な聲音であつ

たたつた一つの提灯が力のあやめもわかぬ木下闇。耳を澄ませば、ブッポーソーとその音は、かすかにかすかにかすかに木靈する。なんとさみしい啼き聲であらう幽氣を帶んだそのこわねは、電燈の下や、ガラスのはまつた住居で、聞くべきものではない。餘りに現世を隔離した遠い世のもの丶こわねだ。幽かにその聲は續く。

山麓の宿屋の主人が、此の頃は此處のほうがよく聞えます。と言つたその聲が、かすかに聞えだしたのだ。耳を澄さねば、それとはわかぬ遠音なのだそら見たことか、山頂へ行かなければはつきりとは聞えない。そら見たことかと、私達は駈足で山巓まで來たのだ。お丶聞える。手にとるやうに二つの聲が。

ブッポー　と啼くは雄、ソーと續けるは雌といふ。それが渾然一つの音になつて、聞たる初夏の暗夜に響く。

歸る人達は歸り、眠につく人達は皆めい〳〵の小屋に歸つて、私達はもとの同行三人になつた。

廿一夜の月はまだ登らず、降るよな星月夜、冴え渡る大空に、何故か流星のわけても多く見出される夜だ。

萬籟聲無き靜中に動くは樋の水、私の心。

人皇四十二代文武天皇の勅願所、聖武帝の御時には、天皇御惱御平癒恩謝のため、光明皇后の御參拜あらせ賜ひし靈域、健脚の役の行者すら他に道を求めたといふ由緒づきの行者返り岩、曰く何々古跡名勝の多い山であるが、一山卅六坊の龍盛は僅かに何々院跡の建札にありし日を偲ばしめ、昔は御朱印地であつたといふ二つの寺に今も數人の僧侶は居つても、鐘樓の甍は破れて、この鐘つくべからずの墨痕いかめしくそれはそのかみなにがしの院主でおわしたであらう人々の墓も丈にあまる雜草に埋もれた、數々の憐れ深いなかにも私は尼の行道の傳說にわけても淚を注ぐ。

そこは開租利修仙人の出家前の妻淨行尼が、遙々と仙人を尋來りしも、女身は不淨なり近くべからず、と身を蹴してしまつたので、巖頭から千仞の渓谷に墜死したといふところだ。

私達は女であるがために、得るべき道も得られなかつた數多の哀話を、東洋の傳說に聞かされる。

女人は罪深い者として、特殊の取扱ひをうけたものだ。

けれども佛陀は提婆達多品に、一珠投受し終れば、八才の龍女もよく成佛することを說かれて居る。

釋尊の會下には、耶輸羅姬始め多くの比丘尼が、比丘達と勤行を許されて居つたものが、次第に卑下されて女人の山入禁制は、不文律となつてしまつたその間の消息を、今更詳にする要はなくとも、此處にはまぎれもない、今古の男子專制の御都合主義が見出されるのだ。

（以下三十三頁へ）

女工を寄宿舍より解放せよ！

内務省の寄宿取締案の不徹底を難ず

大勢はおそろしいもの。

松村警保局長がちよつと梶のとりやうを變へたゞけで、公娼解放の日は目の前に近づいた。今まで、公娼に關するどんな事件が起つたときもきつと抱へ主の味方となつて娼妓の取締りをしてゐた警官が、掌をかへしたやうに、娼妓の立場から保護斡旋をするやうに急變したといふのである。ところで此處にとり殘された一園がある。それは娼妓と共に同じ籠の鳥の憂目に泣いてゐる寄宿舍女工の一園である。

女工を寄宿舍より解放せよ！

女工の寄宿舍の問題はきはめて重大である。元來、全國で寄宿舍をもつてゐる工場の九割までが纖維工業の工場——即ち紡績、製絲、織物、製麻等女工の働きで立つてゆく工場である。

そしてこれらの工場の女工の大部分は遠い處から募集されて來て寄宿舍に寢泊りをし乍ら働いてゐるのである。（製絲の寄宿女工が二十三萬人、紡績では十五萬人）

ところで一日の勞働を終えて寄宿舍に歸つた女工に必要なものは、心からの休養、深い眠り、娛樂、修養等々。而して今日の工場寄宿舍の實狀はどうであらう。

さき頃から內務省では工場寄宿舍の改善のために取締案の發布をいそいで度々會合をしてゐるやうであるがその草案なるものをみると、實に不徹底なものである。（製絲工場の寄宿舍は未だ、特に不行屆きのやうであるから、もし、多少なりとこの取締り案の實施が女工を保護するとしたら、製絲工場に於て位のものであらう）

國際勞働協會婦人勞働問題委員會でも、內務省案に對して、特に婦人の立場からした修正意見を提出した女工が大部分である處の工場寄宿舍の改善取締案として、內務省案がお役人である、男子ばかりの考へで決められてゐる點は、婦人委員側の修正意見の提出される事のきはめて當然であるのを思はせるのに充分である。

然し、考へてみるのに、女工の問題に就いて識者の間に、どうのかうのといかに唱へられた處で大多數の女工を今の通りに、あの、全く資本家の支配下にある處の寄宿舍にとぢこめて、高い塀で取りかこんで外界との接觸を思ひ切り斷つて、こき使つておく間は、何の望みもかけられない。

女工を寄宿舍から解放せよ。

紡績女工の解放はこれより外に途は斷じてない。

かなしき發端

伊福部敬子

高い空に、白く光つた雲が散つてゐた。

子供たちは、空地(あきち)の大きな櫻の木の下に五六人、一團(だん)になつて何か遊んでゐた。彼は離れて、小さい三輪車と遊んでゐた。

片方の下駄をぬいでハンドルにかけ、三輪車が動き出してから跣の方の足を三輪車の後の棧にのせて進みつゞける。さういふ事を彼はこの頃ならひおぼえた。(彼はまだ三輪車にのることは出來ない)けれども、それも上手には出來なかつた。彼はしくじつて、思はず後足を地につけなければならない時、「でてんしやバカ」といつては、ハンドルを打つた。彼はそしてたのしかつた。

ふと、どこからか、飴屋の太鼓がひゞいて來た。彼が、すべりぬけた下駄を足にはかせて、眞赭になつた顔をあげた時、子供たちは、塊のやうになつて向ふへ驅けていつてゐた。太鼓は鳴りつゞけてゐた。彼は三輪車をそのまゝにして、走つていつてみた。

自分より大きい子供たちが、皆棒の先につけた飴を、ぐる〳〵まはしてゐた。飴屋の小父さんは、くる〳〵と棒の先に白い玉をこしらへては、「さあ〳〵、おかねを持つてゐる人にあげるんだよ、今度は誰だね」といつてゐた。

彼は、ふと、或事を思ひついた。頷(うなづ)いて、くるりと振向くと、三輪車のところに走りよつて、ピピーツと潔(いさぎよ)い掛

壁といつしよに家の方へ走り出した。
「母ちやま、ウート、ウート、早くよう」
母は立つて髪を梳いてゐたが、振向きもせずに答へた。
「ウート？　ウートなんぞありませんよ」
「いや、母ちやま、アメかふんだか―(から)ウートちやうだい」
(ウートは錢のことである、彼のウートの觀念は實に廣汎である。錢、碁石、キシヤゴ、點取表等の黑白星、お星樣、太陽等々)
彼は、空地でベロン〳〵棒をなめてゐる大きい朋輩のことを考へると悲しかつた。やがて母がビスケツトを出してくれたけれども、まき散らしてしまつた。彼は、彼を凝視めてゐる母の黑い目をかなしく思つた。

母が弟の禹彦を負つて出ていつてしまふと、彼は急に淋しくなつた。
「お母ちやんすぐ歸つて來ますから、外へ遊びに出てはいけませんよ。キーキだから。」
彼は長い間(三日)床の中にばかり置かれてゐた。そして今も頭に白い布を卷いてゐた。彼は蒲團の上に坐つて繪本を壁立てゝ讀んでゐたが、つまらなかつた。彼はふと、二階へ陞つてみようと思つた。欄に出ると、廣い空地に群つてゐる子供たちが見える、豆腐屋が、花が、空が、およそのお二階が――。彼は一抱への玩具をかいこんで梯をよぢのぼつた。「オヤ、舜ちやん、」父である。「あら、父ちやまがゐた」彼は氣が付いた。
「母ちやまのゐない時起きてはいけないよ、後で叱られるから。」
然し、彼は平氣で、眉をあげて、狹い欄の上を刀をかざして走つてゐた。
「じんじんじかじか、じんじんじかじか、さあ來いツ、ケンカだツ」

彼はこれを此頃活動で見ておぼえた。
ハツ、と思つた時、彼の刀は屋根の上にとんぼがへり一つして庭に落ちてしまつた。
「お父ちやん、刀がおつこちたのよう」
「うん、とつて來よう」父はやがて下から刀をもつて來てくれた。（父ならば縁側から手をのばして拾へるのである。）彼は何でも人にしてもらふことがいやになることがしばしばあつた。
「ううん、僕で、僕でとるのよ」
彼は父の手から刀をとると、再び投げおとした。そして梯をおりた。
彼は下駄を穿いて外に出た、そして開戸を押して庭に落ちてゐた刀を拾つた。塀の下から見ると、空地では子供たちが繩とびをやつてゐた、樂しさうな笑聲が、ころ〳〵ところげて來た。彼は「フーちやん」と友達の名を呼ぶと、一散に空地の方へ走つた。
母は、家に入ると、もぬけの殼の彼の床を見出した。
『あなた、舜は？』
「階下(した)にゐないかい」といふと、父は笑ひ出した。そして刀を自分で拾ひにいつた顚末を話した。
暫くして、彼が外から歸つて來ると、母はにこ〳〵笑ひながら訊いた。
「まあ、舜ちやん、どこへいつてたの」
父が彼を抱き上げてくれた。
「舜、よく考へたものだね」
そして、父と母とは頻りに話してゐた、それは彼を褒めてゐるやうであつた。彼はそれが何のためかわからなかつたが、うれしくて、ふざけて、ビスケットを口に押しこみながら笑つた。

彼は四歳(よつゝ)であつた。彼は苦しいものはなかつた。すべては樂しくて、不思議で、彼の理解をこえて複雜でおもしろかつた。しかし、「寒さ」は怖かつた。夕方おそくまで空地に遊んでゐると、「寒さ」が彼を引捉へに來る、夜は「寒さ」が硝子戸の外にうかがひよつてゐる。泣くと、すぐやつて來る。彼は、母の机の抽斗に小さい燒物の般若の面を見つけ出して、それを「寒さ」だと思つた。母が書きものをしてゐる後から、「さむさ――」といつてはその面をさしつけた。

「ね、母ちやま、寒さ、かういふ口してるんでせう」そして面に似せて、口を尖らかした。押入には、眞黑の小父さんがゐた。夜、玩具や繪本などを出さうとすると、眞黑の顏を突き出した。(それは綿を包んだ新聞紙についてゐる、漂白劑の廣告で、まことに醜惨な人の顏である)

母は、ちつともそれがこはくないことを敎へてくれた、そして今日(こんち)は／＼をすれば何にもしないと言つた。彼はよく押入を開けては、その小父さんに今日は／＼をしてみた。けれどもそれは何時の間にかゐなくなつてしまつた。

彼は每晩床に入れられると、母に歌をうたつてくれとせがんだ。すると母はいつも弟を抱いて寢ながら、ちんかい、い、い、い、じぽにたれも（しんずるものは誰も皆すくはれん）をうたつてくれた。彼の知らない歌も、いくらでも歌つてくれた。彼は、「お母ちやん、日曜學校の先生のやうだね」と思つた。そして彼は何時の間にか眠くなつてしまふのであつた。

彼は、自分が眠つてゐる間に自分以外のものがどうしてあるか「父は、母は、玩具は、ウート（星のこと）は、アカ（犬）は、カッコ（鷄）は？」それが知りたかつた。そしてどうしてもわからなかつた。

彼がふと溫い體を感ずると、何かいふ父の聲と、頭を撫でる手とを感じた。又眼をさますと、そこに明るい晝があつた、禹彦が火のない火鉢から灰をつかみ出してたべてゐた、母が臺所にゐた、そしてローチョクとキヤラ

メルとが、ちやんと枕下にあつた。彼はそれ等がどうして在つたのか、きのふもつてゐたものが、ちやんとそこにあるのを不思議でならなかつた。

「お父ちやん、ローチヨクあつたよ、ほら」

彼は何といふことなしにすべて樂しかつた。

「舜、今日はよかつたねえ、動物園には何がゐたの、早くこゝへ來て敎へてちやうだい」

母は、父と並んだ夕食の膳から彼を呼んだ。

「舜、母ちやまに早く話しなさい」

けれども彼は母の机の前に立つて、さつきから物も言はないで、わけのわからない曲線を引きつゞけてゐた。

彼は、さつき父と一緒に歸つて來た時、臺所の母から「まあ、いゝお帽子を買つて頂いたねえ、見せてごらんなさい」と先手を打たれたので、はにかんで、只今をする機(しを)をなくしてしまつた。その中、父が母に遲くなつた理由や、長い間の望みの動物園につれていつた事を話しておる間に、すばやく彼等の間を通つて、母の机の前にいつた。そして何かしら書きはじめたのであつた。

「舜、早く御飯をお上りよ」

母はもう一度彼を呼んだ。とその時、彼は母の鼻先へツーと何かつきつけた。

「ドーブツ(動物園)でこいだけ見て來たの」

「まあさう、どれ〳〵拜見」

母は笑つた。見なかつた母に自分の見て來た愉しさを分たうといふ心持、心に止めたものを表現しようといふ欲望、彼女はそれにほゝゑんだ。しかし、それは、縺れた糸か、蚯蚓でしかなかつた。母は彼にこれ等が何であ

るかを訊ねるのを、氣の毒のやうに思つた。それで暫くだまつてゐた。けれども、彼は自分の繪が母には通じないのを不思議がる風もなかつた。
「ライオンと、熊と、蛇と、象と」
彼は、彼の畫いた繪を指し示して母に敎へた。
「これは何？」「豚の子」
「舜、かういふのもゐたらう」
父が唇を突き出してみせた。
「うん、いのしし」
彼は何時の間にか食べ始めてゐたが、
「お父ちゃん、こひととが猪のまねをして水のんでゐましたね」
そしてぱくぱくと水を呑む眞似をした。
父と母とは笑つた。そして何かしら頻りに話した。父は彼がねむくなるまで抱いてくれた。
彼は、母と玩具屋の店先に立つてゐた。
「舜ちやん、今日はこれでおきませう、あした又いいのを買つてあげますからね」
母は、木製の汽車を彼の手にもたせようとして、その中に興味を見出させようとして、一生懸命であつた。
「いやいや、あれがいゝの、あれがほしいの」
彼は、棚の高いところにある汽車を指した。彼は此の間からそれと同じ汽車でヒロちやんと遊んだ。それは軌道があつて、汽車が組立てるやうになつてゐた、石油をたいて走らせるものである。彼はそれがほしかつた。彼は毎日、ヒロちやんやうの汽車買つてちやうだいと母にせがんだ。

埋草

十月の十二、十三と足尾に行つて來ました。連日の持ち越しの過勞が汽車の中で一どきに出て、心もからだも痺れを覺えるやうな氣持でありました。

然し沿線の秋は實にようございました。『あゝ、秋だ』私は泌々とから歎息をしました。

◇

然し、足尾(間藤驛)に着いた時みると、目路の限り山も野も川つぷちも、一つの青いものもなく實に荒凉たるものであるのです。』からも見事に、資本主義といふものは全てのものを搾取して行つていゝのか！』と、私は思はず怒りに慄へる手を握りしめて心に問ふたのでした。

實に、銅で名高い足尾の山の鑛毒は、數千の坑夫の命を縮め、まわりに住む人たちの健康を脅し、山をこわし川を汚して、あのやうに見るも無殘な骸骨の山野と化してしまつたのです。濛々と吐き出す煙突の煙りの臭ひは、實に息苦しくてたまらないものでした。

汽車の中で小學校の上級と覺しき女の子が二人次のやうな歌をうたつてゐるのを聞きました

渡良瀨川には
魚がゐない
足尾、足尾、足尾
足尾はけち(?)な處

子供の歌にもあるやうにこの渡良瀨川には魚が住む事が出來ないのです。(近頃は盛んに資本家側で放ち飼ひしてゐるさうですが)そして草や木の青いものを樂しまうとするならば、鑛毒のない土を遠い處から持つて來なくては駄目だといふのです。

◇

足尾近邊の野や山や川やの自然は實に素晴しくいゝのです。そのいゝ自然に對してこれは又實にぶつこわしな、大工場が町の過半を含めて建てられてゐるのです。坑夫たちの社宅といふのは、十軒一棟位の割で共同便所を一つ宛持つて滅茶苦茶に建並べられてあります。子供の多いこと！私はすぐにさう感じないではゐられませんでした。

『鑛夫たちの一生はこの長屋の中で埋もれてゆくのです』

『一生が？勤續して昇格したらどこへゆくのです』

『何處へもゆく處はありません一生埋たつても同じです。いや第一、そんなに長くこの山の働きに、人間は堪えられるものではありません。』

◇

足尾の女房たちは樂なものです。亭主がかうして山の中で命をすり減らして働いてゐる間、女房共は、家で煮炊き洗濯をするだけであとはぼんやりと遊び暮してしまふのです、といふ事を私はよく聞きました。

内職でも奬勵したらどうでせうと、聞くと、こんな不便な處へ持つて來たんでは、結局貧乏をしても遊んでゐた方がましだといふ位にしかならないのだといふ事でした。

それに女なんて駄目ですね、組合運動のことをまるで理解してゐないんですから、と云ふ事でもありました。それについては私はかういひたいのです。聞く處に依ると、イギリスの炭坑地方では、女が非常に戰鬪的になつて、夫たちの廉すぎる賃銀に比べて食料品や諸物價の高すぎる苦しみ、悲慘な之の住宅等に就いて、これから自分らの生活を救ひ出すためには、もう徹底的に闘つてゆくより外に途がないと云ふので、實に勇敢に男子と一緒になつてストライキをつゞけてゐるといふでありませんか。

全くさうあるより外ないのです。足尾の長屋をみたときも私はさう思ひました。『何故あなた方は、こんな悲慘な生活にひしがれてゐなければならぬのです？』と。何故足尾の組合員たちはもつと、自分の家族を教育してゆくことに力を注がないのでせう。(おく)

勞働農民黨の分裂に就て

無産大衆の興望をになうてせつかく順調な發達をなしつゝあつた勞働農民黨が、先頃の中央委員會で左翼と右翼とが正面衝突をして分裂したことは、そこにどんなに必然的な事情があるとしても遺憾に堪えない事です何れ、これについて悉しく來月號で論じたいと思ひます。



秋のふけゆく頃

……秋の御支度寒さの御用意は三越……

秋も漸く更けて、菊に、紅葉に美しく映える頃となりました。秋の御支度、寒さの御用意遊ばす時節で御座います三越では新装の店内に、それらの流行品と實用品とを澤山に取り揃へました何卒御用命の程偏に御願ひ申上げます

十一月の三越

◆格安反物賣出し	一日より 十五日まで
◆淡交會第二回展覽會	二日より 十日まで
◆江馬長閑氏新作漆器展覽會	二日より 十日まで
◆大倉陶磁器 洋畫家餘技額皿展覽會	十四日より 二十日まで
◆商工省主催 廣幅織物陳列會	十五日より 二十一日まで
◆家具新製品陳列會	十六日より 二十六日まで
◆運動器具及寫眞展覽會	十六日より 二十六日まで
◆春衣裳陳列會	十八日より 二十八日まで
◆新製半襟陳列	十八日より 二十八日まで
◆岡田泰祥氏外遊スケッチ展覽會	二十三日より 二十八日まで
◆漆藝會第七回展覽會	二十三日より 二十八日まで

東京市 **三越呉服店** 駿河町

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
大正十五年十一月 七日 印刷納本

婦人運動

第四巻 第十號 【定價二十五錢】

